

看護大学生が抱く高齢者イメージ —老年看護学臨地実習前後調査比較—

栗山 真由美, 上仲 久, 岩坂 静子

看護学部看護学科成人・老年看護学講座

看護大学生の抱く高齢者イメージ変化を実習前後の比較から高齢者理解を正しく理解する教育内容を検討することを目的に祖父母との同居の有無およびSD法を用いた質問紙調査を実施した。結果, ①学生の22%が祖父母との同居経験があった。②設定した23項目について同居の有無による有意差は認めなかった。③学生の高齢者イメージ平均値は実習前4.31, 後で4.47と肯定的に傾き有意差を認め, 7項目について有意差を認めた。④「大きいー小さい」「鮮やかなーあわい」などの視覚的な項目は否定的なイメージのままであった。老年看護学実習の対象者は, 女性が83%を占めていたため, 会話を通してあたたかさや優しさに触れる過程の中で「親密性」や「温和性」など肯定感が高まったと考えられた。看護学生は老年看護学実習のみならず, 多領域の看護学実習で高齢者と深く関わっており, 学習進度の過程で, 大学での授業, 実習による知識や体験が影響していると可能性が考えられた。看護の対象者となる高齢者のケアの担い手である看護大学生が高齢者のイメージを形成する上で, 大学での授業や実習, また地域社会との繋がりやふれあいを通して高齢者イメージを多様性と個性をもったイメージで捉えられるような教育内容の検討を重ねていくことが重要である。

マダニ媒介性感染症予防のための日常生活圏における マダニの生息調査

田中 久喜¹⁾, 佐藤 裕見子²⁾

¹⁾ 看護学部地域保健看護学保健師コース, ²⁾ 看護学部地域保健看護学講座

近年野生動物の増加などに伴い, 野生動物に付着して移動するマダニ類の人間の日常生活圏への侵入が報告されている。マダニ媒介性感染症には感染症法において4類感染症に分類されるライム病や日本紅斑熱, 重症熱性血小板減少症候群(SFTS)があり, それらの予防にはマダニに刺咬されないことが重要である。本研究ではマダニ媒介性感染症の感染予防には刺咬されないようマダニの生息域を把握することが重要であると考え, 日常生活圏におけるマダニの生息調査を行った。簡便で調査者による差が生じにくいFlagging法による調査の結果, 日常生活圏内の野生動物のフィールドサインがあった地点から, 全ての発達段階のマダニを継続的に捕獲することができた。このことから野生動物の行動圏内にはマダニが継続的に供給されていることが示唆された。このような環境においては一時的な駆除は効果的ではなく, 感染に対して「正しく恐れる」ための健康教育が必要であると考え。簡便な調査方法は効果的な健康教育に利用できると考える。またマダニに刺咬されやすいペット飼育者や農林業従事者への注意喚起, 医療従事者のヒトーヒト感染予防策の徹底が必要であると考え。